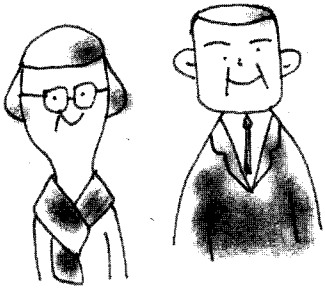
出会いから再会へ

津守　真（M）
津守房江（F）



二〇〇七年の秋から冬にかけて、私たちはそれぞれ体調を崩しておりましたが、今年の一月、二人の体調が回復し、毎年卒業生を招いて行われる愛育養護学校の同窓会に、久々に出席できたのはうれしいことでした。

M　そのとき私が考えていたことは、一人の力ではできないことも、みんなで力を合わせることによって、予想以上に立派に成し遂げられることがしばしばあるということでした。

この日私どもが到着する前に、いろいろなグループが自由に座れるように、各クラスから運んできた机が三つ四つずつ並べられていました。

F　私は会場に足を踏み入れるや、出会う卒業生の家族の一人ひとりが思いがけないほど成長して、そ

れぞれが立派な家庭をつくっていることに驚き、感じ入りました。

M　私どもは退院（二〇〇八年一月）してすぐに、『出会いの保育学―この子と出会ったときから―』※という本を出版しました。これは、『幼児の教育』に対談として連載してきたものを、入院する前に出版社に渡しておいたものです。

その「あとがき」を書いたとき、私は病気になってから、退院するまでの間に、自分の身に起こったことを考えました。

この子たちとは、まさに久々の再会です。私自身についても、一人ひとりのことでも、そこにはいろいろなドラマがあったことを想い、味わっていました。出会いということから言えば、病気や障碍（しょうがい）は出会いたくない出会いですが、このことによって、ここの子どもたちのことがもっと自分に近くになりました。

F　私が座ったのは、S君の一家四人のテーブルです。真ん中に置かれたお菓子を、青年になったS君が同じテーブルの人に分けていました。それがS君の周囲の人に対する気遣いだということにすぐに気が付きましたので、私も一緒にお菓子をつまみました。このS君を中心に、お姉さんと父親と母親は穏やかな落ち着きをもって見ているので、テーブルの周囲にいい雰囲気が漂っていました。

お姉さんがこの家族の要になっていて、公立養護学校の先生になっていることを話されました。以前弟のS君の障碍のことから、養護学校の先生を目指していると聞いていたので、それが実現したことを思い、晴れ晴れとした未来がS君がいる家庭の中で開かれてきたのだと思いました。「何と良い家族になったこと」と、温かな感動が広がりました。

M　それぞれに、この子たちを中心にして、家族が落ち着いて今を生きているのですね。父親が支え、母親が成熟して生活し、きょうだいが今、社会に巣立つところまで来ているのですね。

F　後半、私は別の部屋で車座になって、母親たちに話をしました。『出会いの保育学』という本の中の「出会い」ということは、自分の枠から出て会うことと話しました。私たちは愛育の保育の場で、一人ひとりの子どもと出会い、私たちが育ててもらったことを思いました。

　重度の障碍を負ったM君は、今日はお父さんが家で見ていてくれるとのことで、若かったお父さんが今そうやっておかあさんを支えて、陰の力になっていることがわかりました。美少女のようだったお母さんが、ふっくらと穏やかになっていて「わたしはあんまり良い人にならないことにしました」と耳元でささやいてくれました。実家の応援も少ない中で「よくぞこんなに、良い家庭をつくって……」という思いがここでも心に満ちてきました。

　私の顔を見るとどういうわけか涙が出てという、忘れられない一人の母親と再会した時には、愛育擁護学校に通い始めたころに、彼女の母親が遠くから訪ねて来て、この母親のことを「この子は、本当に良くできた娘で、こんな大変な中で、よく頑張って子どもたちを育てている」と、涙ながらに娘の家庭を心配して話されたことが思い出されました。

M　気が付くと、私の傍らにY君が身を寄せていました。幼いころ、彼は公園の中を走るのが好きでした。私が心配してもきっとそばに戻って、私の目を真っすぐに見ました。今日もふと気が付くとこの子がそばにいるのです。何か話したいのだけれども、言葉が出てこないという様子でした。「私どもは、

最近、キリスト教の洗礼を受けたのです」と、Y君の母親が言葉を添えました。上に目を向けて生きようとしている家族の姿に、私はこの家族の健全さを思いました。

F　現代の家族の問題は、しっかりした人間の基盤として取り上げられることは、少ないように思います。少子化対策として考えられたり、家庭をつくらないことが新しく、晩年の生活をシンプルにするべきだと言われたりもします。

しかし、今日私が出会った家族は、障碍をもつ子を中心にして、きょうだいもさまざまなドラマにぶつかりながら上向きに生きておられます。

古くさいかもしれませんが、夜遅くまで相談に乗りきょうだいの問題まで親身に相談を受けて、最も小さい共同体である家族を、それぞれの時期の職員がみんなで支えてきたことを思いました。

M　それが日常の保育につながっているのですね。ここの保育の場が長く続いてきたことの根底に、こうした家族と職員の関係があります。乳幼児は人間の基礎の時期で、まずそこをしっかり培ってきたことの果実を今日は見せてもらいました。

（時間も過ぎ、S君が不機嫌になると、その妹がすっと立って、その子の好きな曲をピアノで弾きました。S君は心が静まり、みんな一緒に連れ立って帰りました）。

出会いの後の再会も、新しい喜びをもたらし、この日は本当にうれしい日でした。

（保育研究者）

※津守真・津守房江著『出会いの保育学
この子と出会ったときから』ななみ書房二〇〇八年